

敦賀市文化財

パンフレット

Cultural Assets of Tsuruga City



・つるがの歴史と文化財

つるが 先史から古代の角鹿

敦賀では縄文時代前期（約 6000 年前）ごろから人々の活動の痕跡が確認できます。近年、縄文時代の遺跡から出土した黒曜石を科学分析したところ、その産地が隠岐島であることが判明したことから、当時から日本海側を陸伝いで結ぶ、物資の交易ルートがあったことがわかっています。

弥生時代に入ると、大規模な集落が敦賀平野の東部を中心に現れ、その出土品からは滋賀や東海、北陸など周囲の様々な地域の影響を受けており、陸路、海路を利用した活発な交流がうかがえます。弥生時代中期（約 2000 年前）から後期（約 1800 年前）にかけて、敦賀平野と敦賀湾を見下ろす、天筒山の高台に高地性集落である舞崎遺跡が営まれました。この遺跡は上記の交流に関連した見張り台であったと考えられています。

古墳時代中期（約 1500 年前）に、敦賀最大の古墳である向出山 1 号墳（☆国指定史跡 中郷古墳群）が出現します。直径約 60 m の円墳で、2 段築成、葺石を備えていて、2 基の竪穴式石室から鉄地金銅装眉庇付青（金メッキを施したかぶと）、鉄地金銅装頸甲（金メッキを施した首まわりのよろい）、大量の鉄製武器、銅鏡など、全国でも有数の副葬品（○市指定文化財 向出山古墳群出土品）がみつかっています。この時期はちょうど「倭の五王」が使いを送った記録が中国に残っているなど、朝鮮半島を含む大陸との対外的な交流が盛んであった頃であり、これらの出土品は、敦賀が対外的に重要な港であったことを示す、貴重な文化財です。

< 国宝・国指定文化財☆、福井県指定文化財★、敦賀市指定文化財○、国登録文化財・>



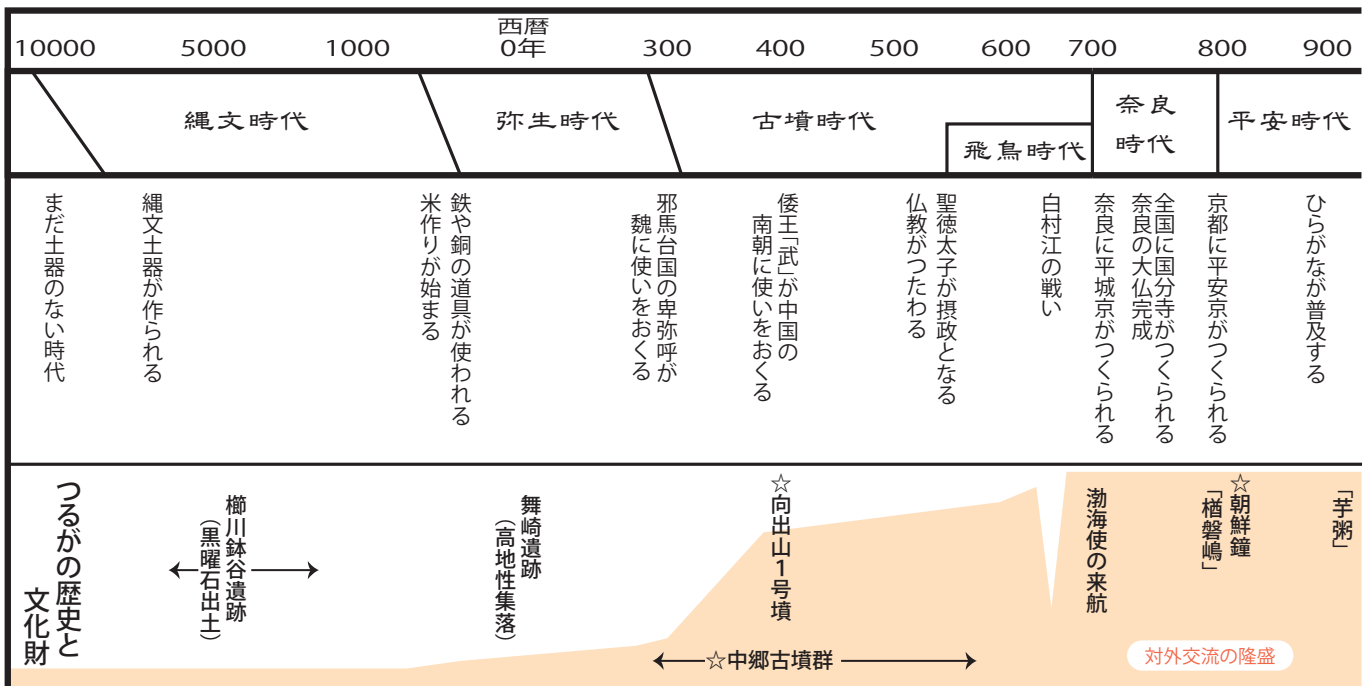
1. 榊川鉢谷遺跡出土 黒曜石薄片



2. ○向出山 1 号墳出土 鉄地金銅装眉庇付青



3. 向出山 1 号墳出土 鉄地金銅装眉庇付青 復元イラスト



8世紀末に書かれた『日本霊異記』には、桓武天皇の時代（約1200年前）に橘磐嶋という人物が、奈良の都から都魯鹿の津（敦賀港）まで買出しに来るというエピソードが掲載されています。この当時、現ロシアの沿海地方にあった渤海という国から、使者が頻りに日本を訪れており、その際に敦賀港にもたらされた海外の品々（唐物）を多くの人々が買い求めたようです。また、敦賀には使節を迎えるため迎賓館として「松原客館」が置かれたといい、日本海岸の各地へ来着した渤海使を、都へと送迎する重要な役割を果たしていました。その後の平安時代においても「唐人（宋人）が来航している」、「敦賀にいる宋人に写経を依頼した」等、貿易に伴い中国から渡来した人々が、敦賀に居住していたことを示す資料がのこっています。

この貿易により敦賀は繁栄をきわめていたようで、たとえば『今昔物語集』にでてくる「芋粥」の話では、敦賀に住む藤原利仁に招かれた都の人が、盛大に歓待されたくさんのお土産を持たされたというエピソード、また12世紀後半（約850年前）から造営がはじまった深山寺経塚群において、青白磁の皿や中国の湖州で作られた銅鏡などの多数の「唐物」と、20枚を超える日本製の銅鏡、また多量の刀剣類が出土したこと（★県指定文化財 深山寺経塚群出土品）からも、当時の隆盛がしのべられます。

中世の敦賀

鎌倉時代に入ると海外との貿易は極めて少なくなり、敦賀は徐々に衰退していきました。さらに室町時代に入った建武3年（1336年）に、後醍醐天皇の皇子である尊良・恒良両親王をかくまって戦われた金ヶ崎城（国史跡 金ヶ崎城跡）の戦いで、両親王と氣比神宮を中心とした敦賀勢は敗れ、敦賀の町も大きな損害を受けました。その後も戦国時代の織田信長による越前攻めなどの多くの戦乱の舞台となりました。また滋賀県長浜市との境界にある玄蕃尾城（☆国指定史跡 玄蕃尾城（内中尾山城）跡）は、賤ヶ岳の戦いの時に柴田勝家の本陣として用いられた山城で、敦賀方面と北国街道をおさえる重要拠点に築かれました。



4. ★深山寺経塚出土品 1号経塚出土遺物



5. ★深山寺経塚出土品 3号経塚出土 湖州六花鏡（中国製）



6. ☆史跡 金ヶ崎城跡（花換え祭りの金崎宮付近）

1000	1100	1200	1300	1400	1500	1600	1700	1800	1900	
平安時代		鎌倉時代		室町時代		江戸時代			明治 大正 昭和	
				南北朝	戦国時代					
「枕草子」「源氏物語」 藤原道長が摂政となる		源頼朝が鎌倉幕府をつくる 源義経が平氏を滅ぼす		南北朝にわかれ対立する 鎌倉幕府が滅びる		足利義満が金閣寺を建てる 南朝と北朝が一つになる		北前船の交易が盛んになる		日露戦争 最初の鉄道が敷設される 大政奉還
		元寇		応仁の乱 後期倭寇		鉄砲伝来 賤ヶ岳の戦い		鎖国 関が原の戦い		満州事変 太平洋戦争
		★深山寺経塚群		☆金ヶ崎城跡		☆玄蕃尾城跡 敦賀城		☆西福寺御影堂		☆旧敦賀倉庫 ★旧大和田銀行本店 赤レンガ倉庫 旧北陸線トンネル群 旧敦賀港駅ランプ小屋
						☆柴田氏庭園 ☆おくのほそ道 素龍清書本		☆武田耕雲斎等の墓		☆高徳寺本堂 ☆氣比神宮大鳥居
								日本海交通の隆盛		

対外交流の衰退

日本海交通の隆盛

近世の敦賀

戦国時代末(約400年前)には、敦賀は大谷吉継に治められていました。ちょうどこの時期に、敦賀の町は再編され国内物流拠点として整備されました。そして戦国時代の争乱が終息し、豊臣秀吉が荒廃した京都の復興と、大坂城・伏見城の建設を始めると、敦賀は東北地方からの木材移入の拠点となりました。現代風にいえばプレカットの規格材である「^{たいこういた}太閣板」として現地加工され、船積みされて敦賀に輸送された材木は、山を越え、琵琶湖を渡って京都・大坂に届けられました。

関ヶ原の戦い(1600年)で大谷吉継が戦死し、敦賀城は破却されたことで、敦賀は城下町でなくなりましたが、大谷吉継が整備したインフラを活用するかたちで、日本海を用いた国内物資輸送拠点として急成長しました。神楽町にある高德寺の本堂(★県指定文化財 高德寺本堂)は、商人ひとりの寄進だけで元和元年(1615)に建てられたと伝えられるなど、港の活況で栄えた当時の敦賀は、井原西鶴の「日本永代蔵」において「北国の都」としてそのにぎわいを紹介されています。

元禄二年(1689年)に松尾芭蕉がおくのほそ道の旅で敦賀を訪れ、仲秋の名月の前日の夜、氣比神宮で「月清し 遊行のもてる 砂の上」と詠んだ時に目にしていた大鳥居は、正保2年(1645年)に建立されたものです(☆国指定重要文化財 氣比神宮大鳥居)。2日後、色ヶ浜まで船を仕立てて芭蕉を案内したのは廻船問屋の^{てんやごろうえもん}天屋五郎右衛門であり、当時の文化の担い手は商人を中心としたものでした。



7. 永賀寺九重塔(伝 大谷吉継供養塔)



8. ★高德寺 本堂



9. ☆氣比神宮大鳥居 (仲秋の名月と氣比神宮)



10. 氣比神宮境内の芭蕉像

17世紀中頃に、敦賀を経由せず下関まわりで大坂湾と東北、北海道を直通航路で結ぶ「西廻り航路」が開拓されると、特に重量物である米の移入量が激減しました。18世紀代は松前物といわれた北海道の産物取引が近江商人を中心に行われていましたが、以前より取引高では低調になっていました。

19世紀になると、日本海側各地の港で様々な商品を売り買いして利益を上げる「^{きたまえぶね}北前船」の航路と敦賀寄港が盛んになりました。この船により、敦賀には北海道のニシン、昆布が大量にもたらされた結果、港に多くのニシン倉が立ち並び、港は活気にあふれました。廻船問屋の^{しょうやませいべえ}庄山清兵衛は、「^{たかとうろう}州崎の高燈籠」(★県指定史跡 州崎の高燈籠)とよばれる灯台を享和二年(1802年)に建て、敦賀湊に出入りする船の貴重な目印としました。この時期の繁栄は敦賀地域全体に及んだ



11. ★州崎の高燈籠

ようで、港以外の地域でも、西福寺御影堂や柴田氏庭園の書院などの大規模建造物や、石鳥居や句碑などの石造物等が相次いで建てられました。氣比神宮の秋の祭礼で巡幸される山車（〇市指定文化財）も、この時期に現在見られるような豪華な装飾のものになったようですが、有力な商人の中には、その山車を複数所有するほど裕福な家もあったようです。

幕末の元治元年(1864年)には、^{そののうじょうい}尊皇攘夷を唱え陸路京都を目指して進軍していた^{たけだこうんさい}武田耕雲齋らの水戸藩の浪士達が、2月の雪深い敦賀市新保（〇市指定文化財 武田耕雲齋本陣跡）で降伏し、港のニシン倉に幽閉された後、翌年353名が来迎寺野で処刑される（☆国指定史跡 武田耕雲齋等の墓）という悲劇の舞台にもなりました。

近代の敦賀

江戸時代を通じて日本海と京都、大阪を繋ぐ役割を果たしていた敦賀は、その後、明治2年(1869年)に新政府が決めた最初の鉄道敷設路線においても、開港場であった横浜港、神戸港から東京、大阪へと繋ぐルートとともに、敦賀港と琵琶湖水運を結ぶ鉄道ルートが選定されました。明治5年(1872年)10月14日に、新橋―横浜間に日本最初の鉄道が開通してから、10年もたたずして敦賀の金ヶ崎駅に鉄道が運行することになり、明治15年(1882年)3月から正式運行が開始されました。そのときに金ヶ崎駅構内に建てられたランプ小屋や、鉄道橋の通称「眼鏡橋」などの遺構が市内に現存しています。

その後、鉄道が福井、金沢と延伸していくと、日本海航路を用いた国内輸送は激減し、敦賀は苦境に立たされます。そこで国外航路の獲得のため、大和田銀行の創始者である大和田莊七が主導して運動し、開港外資貿易港、さらに明治32年(1899年)には開港場の指定を受けることができました。

そして明治38年(1905年)の^{ニューヨーク}紐育スタンダード石油会社倉庫（・国登録有形文化財）の完成により、アメリカ産石油の直輸入が開始したり、明治45年(1912年)には鉄道で東京から敦賀金ヶ崎まで来て、敦賀港から海路ウラジオストクへと渡り、シベリア鉄道を経由して欧州各国に至るといふ、新橋―金ヶ崎間の欧亜国際連絡列車が運転を開始するなど、国際港として徐々に発達したことから、大正11年(1922年)には、より大型船が利用できるよう港湾修築工事に着手、昭和7年(1932年)に竣工しました。この時期は、港には当時最先端のデザインを採用した敦賀倉庫（・登録有形文化財

旧敦賀倉庫株式会社新港第1号・第2号・第3号倉庫）が、また町のメインストリートには迎賓館・公会堂機能を持った大和田銀行本店（★県指定文化財 旧大和田銀行本店）が建てられ、町はモダンな雰囲気にあふれました。



12. 〇金ヶ辻子山車



13. 旧敦賀港駅ランプ小屋



14. 眼鏡橋（六田暗渠）



15. 旧紐育スタンダード石油会社倉庫北棟、南棟



16. 旧敦賀倉庫株式会社新港第1号・第2号・第3号倉庫（通称：敦賀倉庫）

昭和10年代、日本の大陸進出により、大陸との物資取扱量が激増し、欧亜国際連絡列車を迎えた港岸壁のモダン建物群は、石炭など物資置き場確保のために取り壊されました。そして大陸との重要な物流拠点になったゆえに、昭和20年7月12日、日本海側で最初の空襲被害をうけ、109名もの市民が犠牲になり、また氣比神宮旧本殿をはじめ多くの建物や彫刻、絵画などの文化財が失われる事になりました。

指定文化財の詳細



17. ☆気比神宮大鳥居

気比神宮 大鳥居

国 建造物 明治 34 年 3 月 27 日指定
気比神宮は、弘仁元年（810 年）の創建と伝えられる越前国一の宮で、古代・中世にはその勢力を誇った。その後戦国の動乱期に朝倉氏とその命運をともにしたが、慶長年間に結城秀康の援助を受け復興を遂げた。大鳥居は正保 2 年（1645 年）に佐渡から流れてきた大木を用いて再建したと伝えられている。木造朱塗の両部鳥居で、高さ 10.93m、支柱間 7.45m である。笠は銅板で葺き、八角の控柱の上に笏谷石製の笠を載せ、基礎部もまた笏谷石とする。大規模な漆塗の鳥居である。

高德寺本堂

県 建造物 昭和 57 年 4 月 23 日指定
明応 9 年（1500 年）、祐怡の開基と伝えられる真宗大谷派の寺院である。本堂は、正面 18.29m、側面 16.03m、入母屋造棧瓦葺で、元和元年（1615 年）の上棟と伝えられている。奥行 1 間と、非常に奥行きが浅く、背面に三つ並びの押板形式の仏壇を配し、後門は開かない。仏壇中央の 2 本の柱を八角とするほかは、すべて面取角柱とする。小規模の改造は見られるものの、全体的に建立当初の形をよくとどめている。また、虹梁・組物・墓股等の絵様等の示す様式も古式であって、伝来のとおり、元和元年上棟の可能性が考えられ、古い形式の浄土真宗寺院本堂の様子を非常によく伝える貴重な建物である。



18. ★高德寺本堂

敦賀西町の綱引き

国 無形民俗 昭和 61 年 1 月 14 日指定
正月 15 日、町内の漁業関係者は夷子方、農業関係者は大黒方に分かれて綱引きをし、豊漁豊作の神意をうかがう行事である。面形等にかかれた記銘から約 400 年前から行われていたと見られる。

祭りの前日までに、稲藁約 360 把を用いロープを芯として直径 25cm の綱が作られる。そして祭り当日早朝、当番の家に神殿を設けて夷子大黒を奉斎し、面形、衣裳、打出小槌などが供えられる。西町通りの東が夷子方、西が大黒方で、綱は軒の高さにつり渡し、魚、米俵などの飾り物がつるされる。夷子・大黒の両神は町内に住む厄年の者が扮する。午後には、町内巡幸、次いで飾り物を奪い合う左義長倒しの行事が行われたのち、見物人が夷子方、大黒方、思い思いの方にとりつき綱引きが始まる。夷子方が勝れば豊漁、大黒方が勝れば豊作という占いが出て、綱引きはめでたく終了する。



19. ☆敦賀西町の綱引き



20. ★旧大和田銀行本店

旧大和田銀行本店（敦賀市立博物館）

県 建造物 平成 22 年 4 月 9 日指定
 昭和 2 年 (1927 年) 竣工。地上 3 階地下 1 階鉄骨レンガ造一部鉄筋コンクリート造の建築である。設計は永瀬・吉田建築事務所、施工は清水組。当初は、敦賀の実業家・大和田荘七が創設した大和田銀行の二代目本店として建設された。1 階のロビーや事務室、2 階の貴賓室などの銀行機能だけでなく、地階にレストラン、3 階に公会堂という公共的機能も備えていた。大和田銀行合併後は、三和銀行、福井銀行の支店として使用された後、昭和 53 年 (1978 年) に敦賀市に寄附された。平成 24 年から大規模な修復により建築当初の姿に復しつつ、市立博物館としての機能も果たしている。

旧敦賀倉庫株式会社新港第 1 号・第 2 号・第 3 号倉庫

国 (登録) 建造物 平成 26 年 4 月 25 日登録
 旧敦賀倉庫株式会社新港第 1 号・第 2 号・第 3 号倉庫は、敦賀港の中央に建つ。昭和 8 年に敦賀倉庫株式会社により建設された、桁行約 50.5m、梁間約 19.4m の規模の鉄筋コンクリート造平屋建の倉庫で、内部は壁で三分割され、東側から 1 号、2 号、3 号の各倉庫となる。外観は段差付のパラペットや小窓の上下の小庇、出入口の庇で水平線を強調する。隅部は一段高い塔屋状としてタイルを逆 L 字形に貼りアクセントとする。倉庫の機能性だけでなく、壁面デザインに当時流行の国際様式の影響が看取される大型倉庫である。



21. ・旧敦賀倉庫株式会社新港第 1 号・第 2 号・第 3 号倉庫



22. ☆金ヶ崎城跡 遠望

金ヶ崎城跡

国 史跡 昭和 9 年 3 月 13 日指定
 敦賀市北東部に位置する山城で、天筒山から北西に延びる尾根上にある。延元元年 (1336 年) 10 月、新田義貞は後醍醐天皇の皇太子恒良、皇子尊良両親王を奉じて金ヶ崎城に入り、足利軍を迎え奮戦した。しかし、戦況が不利になり、義貞は金ヶ崎城を脱出して杣山城へ赴いた。翌年 3 月には足利軍の攻撃の前に金ヶ崎城は落城し、恒良親王は捕らえられ、尊良親王、新田義顕等は自害した。また、戦国期においては、織田信長軍と朝倉・浅井軍が戦った城でもある。城の主要部は現在金崎宮の境内に属し、その背面の高いところには城戸や堀、月見御殿跡などがある。桜の名所としても知られ、例年 4 月に行われる花換祭は春の風物詩として多くの花見客で賑わう。

天満神社 本殿・石之間・拝殿

県 建造物 平成 28 年 3 月 14 日答申
 天満神社本殿・石之間・拝殿は、もと滋賀県彦根市に所在した佐和山神社の社殿であったが、旧社殿が昭和 20 年 (1945 年) の敦賀空襲の際に全焼したため。昭和 35 年にこの地に社殿が移築された。

本社殿は、本殿と拝殿を石之間で結ぶ権現造となっている。本殿と拝殿はともに入母屋造、銅板葺である。柱や長押などは漆塗で、破風や墓股などには鳳凰・龍・獅子などの精巧な彫り物を見ることができる。また本殿・拝殿の内部の天井には、花々等を描いた格天井画がある。



23. ★天満神社本殿・石之間・拝殿

気比の松原

国 名勝 昭和3年6月28日指定

敦賀湾の内奥に位置し、笹ノ川口以西の浜堤上にある白砂青松の海岸景勝地である。指定地はアカマツ・クロマツが茂る国有林である。三保の松原（静岡県）、虹の松原（佐賀県）と並んで日本三大松原の一つに数えられている。古くは気比神宮の神苑であったが、織田信長により没収され、後に小浜藩有林になっている。松原の一部は、第2次大戦以降住宅地・学校敷地などに変わり、面積が縮小している。



24. ☆気比の松原



25. ○駐輦の碑

駐輦の碑

市 史跡 昭和29年12月21日指定

明治天皇は明治11年（1878）10月10日、北陸巡行の際に気比の松原に立ち寄り、白砂青松の絶景を眺めた。明治24年に勝海舟がこの地を訪れ往時を回想して漢詩を詠んだ。この碑は、その漢詩「曾經駐輦處 / 黎首憶甘棠 / 松籟如奏曲 / 海濤和洋々」（曾て駐輦を経し処、）黎首甘棠を憶らす。松籟は曲を奏でるが如く、海濤は和して洋々たり。）を刻んでいる。

武田耕雲齋等墓

国 史跡 昭和9年12月28日指定

水戸・天狗党の武田耕雲齋ら水戸浪士達は、京都に上り一橋慶喜を通じて朝廷へ尊皇攘夷の志を訴えること目的として水戸から中山道を進軍した。元治元年（1864年）10月、武田耕雲齋らが上洛する途中、12月木ノ芽峠を越え敦賀・新保宿で大雪にあい、また、幕府軍に囲まれついに捕われた。翌慶応元年2月武田耕雲齋をはじめ藤田小四郎らが斬罪や死罪に処せられた。斬首された当時の刑場で、遺体の埋められた松原・来迎寺野が史跡指定地となっている。墓碑は小高い塚の上に建てられ、石柵に囲まれている。



26. ☆武田耕雲齋等墓

杳見御田植祭り

県 無形民俗 平成20年2月22日

杳見御田植祭りは、敦賀市杳見区の氏神である信露貴彦神社（男宮）と久豆彌神社（女宮）が合同で行う春祭りである。御田植え祭りは、水田に苗を植えるに先だって、苗の無事なる成長と、お米の豊作を祈願して行う祭りである。5月5日の正午、杳見公会堂を、男宮・女宮の順に、それぞれ「御幣さん」を中心とした35名余りの祭りの行列が出発する。村通りを笛太鼓で囃し「ヤーホーハイヤ、来年も当屋、再来年も当屋」などと氣勢をあげて、神社に渡御する。その後、神社の拝殿で「王の舞」「獅子舞」を奉納し、「田植え歌」を謡い、農具である「えぶり」と苗に見立てた「杉の葉」を使って田植えの様子を芸能として奉納する。



27. ★杳見御田植祭り 王の舞

西福寺書院庭園

国 名勝 昭和7年4月19日指定

西福寺は、正平二十三年（1368年）良如上人の開基と伝えられる浄土宗寺院である。庭は、山容を背景とし山の麓に池を設けている。池は阿弥陀堂の側面に横長に作られ、池中には中島が3島あり、石橋が架けられている。池の西北部には滝石組にかわる大きな自然石が2石あり、水はそれらの上部に積まれた石垣の上を乗っている樋を通して流入している。水分石はみられない。排水は池の東北隅から行われている。なお、書院は延宝四年（1676年）に建立されたといわれているが、園地の地割は書院よりも延享四年（1747年）再建とされる阿弥陀堂に関連深いことから、そのころに庭園も作庭されたものと考えられる。



28. ☆西福寺書院庭園

西福寺御影堂・阿弥陀堂・書院及び庫裡

国 建造物 平成20年6月9日指定



29. ☆西福寺御影堂



30. ☆西福寺阿弥陀堂

西福寺御影堂は文化5年（1808年）の上棟で、正面7間、側面6間の入母屋造棧瓦葺の建物である。阿弥陀堂は文禄2年（1593年）の建立と伝えられ、正面5間、側面5間、入母屋造棧瓦葺である。書院および庫裏は、天和3年（1683年）に書院が建てられ、江戸中期から後期にかけて南側の庫裏が建て替えられ、さらに両者の間が居室に改造され、一体化された。書院は桁行12.3m、梁間16.7m、切妻造銅板葺で、庫裏は、桁行22.0m、梁間15.3m、切妻造棧瓦葺である。これらの建物は、国の名勝である庭園と一体となって豊かな風致を作り出している。

西福寺のスタジイ

市 天然記念物 昭和58年4月1日指定

開山・良如上人が、飢饉に備えずから植えたといわれる。御影堂への石段の両側、向って右に雄株、左に雌株がある。ともに樹高はやや低く、主幹の維管束組織の老化がみられるものの、豊かな梢枝の茂りが見られる顕著な老齢巨木である。樹勢は良好であり、雌株は、例年よく結実する。

敦賀市の南側山麓部には屋敷林木として、自生あるいは植栽によるスタジイの老齢巨木が分布しているが、本樹2株は最も代表的なもので、照葉樹林帯環境を指標とする要素として、学術的に貴重である。



31. ☆西福寺のスタジイ 雄株

朝鮮鐘

国宝 工芸品 昭和 27 年 11 月 23 日指定

この鐘は、中国や我が国のものと異なり、鐘身に縦横の紐をもたず、鐘の上の肩帯・下の口帯には海磯文様を連続させる。下方には八葉蓮弁の撞座と、天衣を翻す飛天二体を、胴の四囲に交互に配する。銘文には「太和七年三月日菁州蓮池寺」とあり、大和七年（833 年）に菁州の蓮池寺の鐘として造られたものである。社伝によると、慶長二年（1597 年）に大谷吉継が豊臣秀吉の命を受けて奉納したものとするが、他の国内の招来鐘の多くと同様倭寇によるものとする異説もある。我が国に残る朝鮮鐘のうちでは、製作年代が最も古く、文様も巧みに鋳出されている。総高 111.5cm、口径 66.7cm。



32. ☆国宝 朝鮮鐘 常宮神社蔵

常宮神社 本殿・拝所・中門

県 建造物 昭和 57 年 4 月 23 日指定
(平成 21 年 3 月 24 日追加指定)

常宮神社は、大宝三年（703 年）、勅命によって社殿の修造があったと伝えられる古社で、氣比神宮の境外摂社として崇敬を集めてきた。本殿は、前室三間社流造の形式を持つ比較的大形の建物で、古くは檜皮葺であったが、現在は銅板葺となっている。正面 6.07m、側面 5.00m および向拝 2.49m の規模を持ち、身舎は円柱、前室および向拝は角柱とする。各部の装飾形式等は焼失した氣比神宮本殿（16 世紀）と共通点が多く、氣比神宮本殿の両流造の後部を省略して成立したのがこの本殿といえるかもしれない。本殿に接する拝所は、正面 1 間、側面 2 間の四脚門形式の向唐門であったようで、伝えられるとおり、氣比神宮の門の移築である。



33. ★常宮神社 本殿・拝所

色浜の産小屋

県 有形民俗 昭和 50 年 6 月 3 日指定

産屋に類する習俗は、全国的に見て瀬戸内諸島・四国・中国・伊豆諸島・北陸等の地方に分布していたが、比較的近年まで残っていたのが敦賀半島であり、色浜の産小屋はわが国で最後まで残ったもののひとつである。昭和 48 年、色浜区の海岸近くにあったものを現在地に移築した。間取り、構造等は昔のまま、二室どり床面積 19.2㎡、備品なども残されているが、現在は使用されていない。妊婦が産気づくところの産小屋に入り、室内にさがっている太い綱にすがり苦痛をしのぎ、出産した。日本書紀に「鵜葺屋」という産所の記事も見られる古い習俗だが、血に対する禁忌に根ざすものといわれる。



34. ★色浜の産小屋

門ヶ崎

市 名勝 平成 25 年 4 月 12 日指定

門ヶ崎は、敦賀半島先端の西側にある白木地区に位置し、日本海に突き出た断崖絶壁である。敦賀半島は花崗岩を基盤として構成され、門ヶ崎付近では花崗岩特有の方状節理が、波浪による侵食や風化によって複雑な幾何学的模様を織り成し、雄大な景観を造り出している。岬の先端部分にある標高およそ 30 m の二列の石柱と波浪によって生じた海食洞は、海上から目にするにあたかも門のような様相を呈している。その景観は、江戸時代に編纂された地誌「敦賀志」に触れられ、また内海元孝が描いた「紙本墨書 門ヶ崎図」にも、海上から仰ぎ見た姿が活写されている。こうした史料の存在は、古くから門ヶ崎が海からの眺望を第一義とする景勝地として知られていたことを裏付けている。



35. ○門ヶ崎 北側からの景観

柴田氏庭園

国 名勝 昭和7年4月19日指定
(平成19年7月26日追加指定)

この庭は甘棠園とも称し、敦賀地域最高峰の野坂山を借景とした回遊式林泉庭園である。園地はL字状に配され、蓬莱島である中島に土橋が架けられている。正面に築山が、その右側に滝石組が配置されている。また、座敷前の園地縁には高低差のある磯浜に玉石が葺かれ、趣を演出している。

庭園を築造した柴田氏は、近世小浜藩の有力農民で、藩の新田開発を請負い、酒井氏の代の寛文二年(1662年)、環濠を備えた方形地割の屋敷をこの地に構えている。元々柴田氏は野坂地域の出身であり、当庭園から野坂山を眺めることについて、単なる借景にとどまらず、氏神の野坂権現を遙拝する意義が込められていたと伝わっている。甘棠園の名の由来は、「詩経」よりとったもので、周の召伯が治めている村々を巡視したとき、村人に迷惑をかけたくないと甘棠の木の下で野宿をしたという、善政を主題にした逸話に基づいている。

平成19年には、文化二年(1806年)に再建された書院を含めた屋敷地全体が追加指定されており、名勝の指定面積は9057.70㎡、敷地内に市指定天然記念物のヤマモモ、クスノキがある。



35. ☆柴田氏庭園 借景



36. ☆柴田氏庭園 書院と州浜



37. ★だのせ祭り

野坂だのせ祭り

県 無形民俗 平成6年5月20日指定

野坂山麓の野坂神社で旧正月の8日前後に行われる、豊作祈願の神事である。当日午前中は祈願式、万歳楽の儀式、当渡しの儀式、午後は、大太鼓を中心に野坂区民が祝詞に合わせて行う、だのせ神事となる。

神事は素褌の衣裳をつけた六人衆により行われ、チサという木で作った鎌を持って踊る「お田打ちの儀式」、青葉杉を早苗に見立てて植える仕草の「お田植えの儀式」からなる。この儀式は、古来より田を作る一連の作業のうち、田植えまでを舞うもので、途中「福男」の種まきや、「えぶりさし」といって田を均す道具を持つ踊り手が現れたり、「小昼持ち」という妊婦と小娘が昼の弁当を持ってくる様子なども交えている。

初午祭り

市 民俗文化財 平成10年3月11日指定

山・稲荷神社の初午祭りは、人身御供という演出で行われている。これは、穀霊神に巫女を奉祭する神事の一形式にヒビ退治の伝説が加わった、豊作祈願の祭りといえる。

厄年の者や集落内の宮座の代表としてゴクカキと呼ばれる8人が選ばれ、晴れ着のヒトミゴクを連れて稲荷神社まで行列する。神社に着き、神事後、ゴクカキは御供であった糯米と豆を蒸したおにぎりに作り、それを入れた二つの櫃を担いで本殿から下りてきて、集まった区民に配る。当地区においては宮座の制が維持され、年齢階梯制による共同体運営の風習の名残もみられるという点でも、市内の希少な民俗行事である。



38. ○初午祭り

武田耕雲齋本陣跡

市 史跡 昭和 34 年 10 月 5 日指定
木造平屋建切妻造、棧瓦葺の建物である。もともとは当時問屋を営んでいた塚谷家の屋敷の一部で、小規模ながら書院造で、門・式台・下段の間・上段の間を備え、式台の柱上の三ツ斗の組物などによって格式の高さをうかがわせている。元治元年（1864 年）12 月 11 日、水戸の武田耕雲齋ら約 800 名が上洛途上で、新保に宿営した時にこの本陣に陣を構えた。この書院で、耕雲齋らは加賀藩の使者と数度にわたる会談を行い、幕府軍に降伏した。それ以来、この場所は新保陣屋とも呼ばれている。



39. ○武田耕雲齋本陣跡（新保陣屋）

瓜生保戦死の地

市 史跡 昭和 36 年 3 月 30 日指定

瓜生保は南北朝時代の武将・杣山城主で、瓜生判官とも呼ぶ。保は延元元年 10 月に斯波高経・高師泰ら北朝方の足利軍に参加し、南朝方の新田義貞らが立籠る金ヶ崎城を攻撃した。ところがこの間に弟義鑑房らが、義貞の甥・脇屋義治を奉じて杣山城に挙兵、南朝方についてを知り兵を引きあげた。そして同年二年 1 月 11 日、今度は五千余の軍勢を率いて金ヶ崎救援に向かい、葉原まで進軍したものの、樫曲付近に布陣する北朝方の今川頼貞軍二万余騎に行手を阻まれ、対峙することとなった。これを突破せんと、2 月 16 日早朝敵陣に突入したが多勢には及ばず、非業の戦死を遂げたのがここ樫曲付近であるという。

このことによって、明治 34 年、保の末裔瓜生寅が先祖をしのび、山上の一隅に保の墓碑を建立した。



40. 瓜生判官保之墓 明治 34 年建立

旧北陸線トンネル群

国（登録）建造物 平成 28 年 2 月 25 日登録
旧北陸線は鉄道庁によって明治 26 年（1893 年）に着工し、同 29 年に敦賀一福井間が開業した。旧北陸線トンネル群は、難所の木の芽峠越えを達成するためにつくられた鉄道隧道で、敦賀市から南越前町にかけて 13 のトンネルが築かれた。昭和 37 年の現北陸線開通後に廃線となり、道路トンネルに転用された。

このうち敦賀市内には 11 のトンネルが連続してのこる。最も南に位置する^{かしまがり}樫曲トンネルは、入口の外^{こうもん}面（坑門）が全て煉瓦製で装飾的であるが、他の多くは切石積みにより意匠と堅牢さを両立させている。トンネル群のほかにも敦賀駅から今庄駅の旧北陸線には、築堤や橋梁、暗渠などの当時の土木構造物が多く^{すいどう}のこり、谷川の水を処理した大型暗渠・畷山谷暗渠は旧北陸線最長の規模を誇る。トンネル群は県道・市道・町道として、畷山谷暗渠は砂防施設として利用に供する。



41. ・旧北陸線樫曲トンネル



42. ・旧北陸線第一観音寺トンネル

休岩寺のソテツ

県 天然記念物 昭和 29 年 12 月 3 日指定
根元の周囲 3.7m、高さ 5.1m。根元から 4 本の枝に
わかれ、さらに南側の一枝が 3 本、西側の一枝も 2 本
にわかれて、計 7 本となっている。ソテツは雌雄異株
の植物。この株は雄株で隔年に開花するという。同寺は、
大比田の南山ふもとにあって、冬も雪が少ない気候のよ
いところにある。

日本海側沿岸域ではその気候条件により老齡巨木は少
なく、生態地理学的に極めて重要である。



43. ★休岩寺のソテツ



44. ★獅子舞

獅子舞

県 無形民俗 昭和 37 年 5 月 15 日指定
敦賀市赤崎に伝わるこの獅子舞は、玉を転がすように舞う玉獅子
が特徴である。また、耳や口の微妙な動かし方等、舞手には修練
が求められる。八幡神社の秋祭りで、宵宮と本祭の 2 回舞われる。
祭礼当日は、獅子頭を納めた獅子宮を舞手が担ぎ、箱提灯を持った
奉賛会の人たちに守られて、公会堂から練り歩き八幡神社に到着す
る。五穀豊穡と悪魔退散を祈願する「鈴の舞」に始まり、獅子の好
物の蟹を食べる「蟹取り」、たらふく食べた後の「寝」と続き、岡目、
ひょっとこ、天狗が太鼓、鉦、ササラ、鈴等の楽器で、おかしな仕
草で獅子を起こす。次の「高い山」で、舞は最高潮となり、獅子は
踊り狂い千秋楽となる。

相撲甚句

県 無形民俗 昭和 40 年 5 月 18 日指定
利椋神社の秋祭の奉納相撲は、「阿曾の相撲」として近郷近在に
知られており、その中入りに踊られるのがこの相撲甚句である。由
来は定かでないが、利椋大明神と八幡大神に、崇敬と感謝を捧げる
神賑の行事として発祥したものらしい。元禄の頃には、化粧回しを
つけた今の姿となったといわれる。

行事が中央で軍配を捧げ、初切から大関までの 10 名の力士が、
伝来の化粧回しをつけ、土俵に勢揃いして数入が行われ、五穀豊穡、
家内安全を祈り、悪を払う勇気と力と忍耐を表現する。音頭取が登
場し、緩やかなテンポの「大踊」が始まる。続いて、ややテンポの
早い「小踊り」となる。甚句踊りや化粧回しの由来、敦賀の名所が
名調子に乗り、最後に全員で後囃子を斉唱して終了となる。



45. ★相撲甚句



46. ☆奥の細道

奥の細道 附 細道伝来記

国 書跡・典籍・古文書 昭和 47 年 5 月 30 日指定

奥の細道は松尾芭蕉の代表的な作品である。本書は元禄七年（1694 年）に芭蕉の弟子の柏木素竜そりゆうが清書し、芭蕉が所持していたといわれるもので、表紙の外題は芭蕉の自筆と考えられている。附指定の細道伝来記は本書の伝来の次第を記したもので、それによると芭蕉の死後に弟子の去来に渡ってから、縁戚関係にある俳人へ嫁入り道具としてなどで伝わり、完成後約 50 年を経て敦賀の俳人白崎琴路せんとしが手に入れたことが記されている。その後、琴路の孫に俳人西村野鶴やかく（十代目孫兵衛）の娘が嫁いだ縁で、江戸後期に西村家に素龍本が贈られ、以来約 200 年間西村家に伝わっている。

寸法は縦 16.2cm、横 14.4cm

玄蕃尾城（内中尾山城）跡

国 史跡 平成 11 年 7 月 13 日指定

福井県と滋賀県の県境にある柳ヶ瀬山（標高 420m）の頂上にあり、北国街道と刀根越間道との分岐点に位置する。城は、天正十一年（1583 年）北ノ庄城主・柴田勝家が賤ヶ岳合戦時の本陣として築城されたと考えられている。

本城は、尾根上に巧みに配置された 4 郭構成で、石垣はなく各郭は空堀や土塁で区画されるとともに、土橋や馬出しで繋がっている。本丸は、高さ 0.6～2m の土塁で囲まれ、東・南・西の三方には幅約 12m × 深度 6～7m の大規模な空堀が廻らされている。本丸の東北隅が一段高くなっていて、礎石が一部露出していることから、櫓などの構造物があったと推測される。

築城形態については、本丸の櫓台や有機的に配置された郭、機能的に築造された土塁や幅広く深い空堀、土橋、巧妙につくられた虎口や馬出しなどが具備され、現存する越前、若狭の朝倉氏や武田氏などの山城の中でも、最も発達した構造を示す、織豊系山城の典型といえる。



47. ☆玄蕃尾城 土塁及び郭



48. ☆玄蕃尾城 南側馬出し



49. ★足壇城跡 天守台遠望

足壇城跡

県 史跡 昭和 29 年 12 月 3 日指定

文明年間（1469～1477 年）当時越前国を支配した朝倉氏の家臣足壇対馬守久保ひきだつしまのかみ ひさやすが築城したといわれる。当地は、越前と近江を結ぶ重要地点で、海津越・塩津越・柳ヶ瀬越の 3 街道が集まる交通の要所であった。元亀元年（1570 年）の織田軍による敦賀攻めの際に落城し、その後一旦回復したものの、天正元年（1573）織田軍による再度の北陸侵攻で完全に城は陥落し、破却されている。現状では学校建設時の改変など多くあるものの、一部に石垣が残存し、また天主台と考えられる跡が残されている。



50. ○小刀根トンネル

小刀根トンネル

市 建造物 平成 8 年 6 月 11 日指定
 明治 5 年 (1872 年)、新橋から横浜間の鉄道開業を始めとして、京阪神、次いで敦賀から長浜間に鉄道が敷設された。小刀根トンネルは日本人技術者による全国でも 2 番目に造られたトンネルで、総延長は 56 m、明治 14 年 (1881 年) 10 月に竣工した。トンネル入口は切石積で、アーチ部分はレンガ造、馬蹄型の構造であり、内部は岩盤の露出部分とレンガ積みの 2 段になっている。

現存する当時の鉄道トンネルはいずれも改修されており、この小刀根トンネルは建設当時の姿を留める最古の鉄道トンネルである。

気比神社の春祭り・秋祭り

市 無形民俗 平成 10 年 1 月 13 日指定

刀根の秋祭りは霜月祭り、あるいは「みやあげ」とも呼ばれる。祭りの当日は早朝から餅搗きが行われ、餅搗き歌に合わせて時折棒杵の先につけた餅を天井まで威勢良く持ち上げる。赤餅は短冊型に切り、白い餅は「牛の舌」と呼ばれる 8 の字型に整える。

これらの御供を奉納する行列は、まず杖を持ったショードン、御幣をかつぐタユウ、次にヒツノフタと呼ばれる少女が歩き、お神酒樽を持ったオミキモチの少女、炭俵を持ち、ヒゲを描いたスミヤキと続く。このように、敦賀や若狭各地の祭りには、神聖な御供を運ぶ役割を少女が担う慣習が、広範囲に伝承されている。



51. ○気比神社の秋祭り 餅搗き

☆国指定文化財

種別	区別	名称	員数	所在地	指定年月日
国宝	工芸品	朝鮮鐘	1口	常宮	昭和 27 年 11 月 23 日
重要文化財	工芸品	孔雀鎗金経箱	1合	原	平成 5 年 1 月 20 日
	絵画	絹本着色 主夜神像	1幅	原	明治 33 年 4 月 7 日
		絹本着色 観経变相曼荼羅図	1幅	原	明治 33 年 4 月 7 日
		絹本着色 阿弥陀如来像	1幅	原	明治 34 年 8 月 2 日
	建造物	氣比神宮大鳥居	1基	曙町	明治 34 年 3 月 27 日
		西福寺御影堂	3棟	原	平成 20 年 6 月 9 日
		書院及び庫裏			
	書跡	西福寺一切経勸進経	25巻	原	大正 3 年 4 月 17 日 (追) 昭和 41 年 6 月 11 日
		紙本墨書 般若心経	1巻	原	大正 3 年 4 月 17 日
	典籍	奥の細道 (素龍清書本) 附 細道伝来記	各 1冊	新道	昭和 47 年 5 月 30 日
重要無形民俗文化財		敦賀西町の綱引き		相生町	昭和 61 年 1 月 14 日
記念物	史跡	金ヶ崎城跡		金ヶ崎町	昭和 9 年 3 月 13 日
		武田耕雲斎等墓		松島町 2 丁目	昭和 9 年 12 月 28 日
		中郷古墳群		吉河・坂下	昭和 63 年 3 月 23 日
	名勝	玄蕃尾城 (内中尾山城) 跡		刀根・滋賀 県長浜市	平成 11 年 7 月 13 日
		氣比の松原		松島・櫛川	昭和 3 年 6 月 28 日
		西福寺書院庭園		原	昭和 7 年 4 月 19 日
(記念物)	(特別天然記念物 カモシカ)		(敦賀市 全域)	(昭和 30 年 2 月 15 日)	

★県指定文化財

種別	区別	名称	員数	所在地	指定年月日
有形文化財	工芸品	日本刀外装	1口	三島町 1 丁目	昭和 31 年 3 月 12 日
		八十一難経版木	6枚	原	昭和 40 年 5 月 18 日
		木製加飾腰高障子	12枚	松島町 2 丁目	平成 6 年 5 月 20 日
	彫刻	銅鑄口 正平丁酉年銘	1口	色浜	平成 26 年 3 月 28 日
		木造 釈迦如来坐像	1軀	刀根	昭和 55 年 3 月 11 日
		木造 不動明王立像	1軀	御名	平成 18 年 4 月 25 日
		木造 毘沙門天立像	1軀	御名	平成 18 年 4 月 25 日
	絵画	絹本着色 観経曼荼羅図 (序文)	1幅	原	昭和 55 年 3 月 11 日
		紫絹金銀泥絵 阿弥陀八大菩薩像	1幅	神楽町 1 丁目	平成 12 年 3 月 21 日
	建造物	常宮神社本殿・拜所・中門	3棟	常宮	昭和 57 年 4 月 23 日 (追) 平成 21 年 3 月 31 日
高德寺本堂		1棟	神楽町 2 丁目	昭和 57 年 4 月 23 日	
旧大和田銀行本店 附 株式会社大和田銀行本店 新築工事設計図等		24点	相生町 7-8	平成 22 年 4 月 9 日	
古文書	西福寺古文書	1,269点	原	平成 17 年 5 月 6 日	
考古資料	深山寺経塚出土品	101点	相生町 7-8	平成 24 年 3 月 23 日	
民俗文化財	有形民俗文化財	色浜の産小屋		色浜	昭和 50 年 6 月 3 日
		大鼓踊り (諏訪神社)		池河内	昭和 28 年 3 月 19 日
	無形民俗文化財	赤崎獅子舞 (八幡神社)		赤崎	昭和 37 年 5 月 15 日
		八幡神社の彼岸祭 (八幡神社)		関	昭和 37 年 5 月 15 日
		相摸甚句 (利根八幡神社)		阿曾	昭和 40 年 5 月 18 日
		野坂だのせ祭り (野坂公会堂)		野坂	平成 6 年 5 月 20 日
雀見御田植祭 (久豆弥神社・信濃貴彦神社)		雀見	平成 20 年 2 月 22 日		
記念物	史跡	穴地藏古墳		櫛川	昭和 53 年 10 月 11 日
		立洞古墳 (2号墳)		井川	昭和 54 年 2 月 6 日
		定壇城跡		足田	昭和 29 年 12 月 3 日
	天然記念物	洲崎の高燈籠	1基	川崎町	平成 4 年 5 月 1 日
		休岩寺のソテツ	7株	大比田	昭和 29 年 12 月 3 日
		彌ノ河内のカツラ	1株	瀬河内	昭和 39 年 6 月 5 日
明神崎の自生モクゲンジ	1群	明神崎東海岸	平成 9 年 4 月 25 日		

○市指定文化財

種別	区別	名称	員数	所在地	
有形文化財	工芸	梵鐘（時鐘・寛文五年紀）	1口	金ヶ崎町	
		脇差（肥前国住源宗次作）	各1口	杉津	
		同拵（岩本昆寛作総金具）			
		赤胴七ツ子地総金具太刀拵	1口	蓬萊町（相生町）	
		獅子・人物文綴織壁掛	1枚	松島町	
		剣 越前敦賀住藤原宗吉作（正保三年紀）	1口	三島町1丁目	
		人物図三所物 縁頭・目貫・小柄（一宮長常作）	1揃	角鹿町（相生町）	
		黒呂色塗鞘脇差拵	1口	角鹿町（相生町）	
		縁頭（一宮長常作） 拵（吉岡因幡介作）			
		黒漆内朱漆塗蒔絵膳（柿谷半月和歌・草花図）	一揃	角鹿町（相生町）	
		12客分			
		短刀 越州敦賀光行作（嘉慶二年紀）	1口	角鹿町（相生町）	
		寒山鉄引篋（一宮長常作）	1枚	三島町1丁目	
		剣（二代越前康継作）	1口	相生町	
	薙刀（敦賀住下総守藤原宗吉作）	1口	堂		
	太刀（越州敦賀住盛重作）	1口	相生町		
	彫刻	木彫 猿田彦面（天文十年紀久々の墨書）	1面	曙町	
		木造 聖観世音菩薩坐像	1躯	請物師町	
		木造 聖観世音菩薩立像	1躯	山泉	
		能面 尉（銘 イセキ）	1面	曙町	
		木造 十八羅漢坐像	18躯	松島町	
		木造 十一面観世音菩薩立像	1躯	大蔵	
		木造 地藏菩薩坐像	1躯	刀根	
		木造 持国天立像	1躯	刀根	
		木造 毘沙門天立像	1躯	刀根	
		楓樹に雉子図・欄間（高村光雲作）	一対	元町（相生町）	
		絵画	壁画著色 観音像図	1面	松島町2丁目
			絹本墨画 風竹図	1幅	原
	絹本著色 阿弥陀来迎図		1幅	栄新町	
	絹本著色 十六羅漢図（額装）		15枚	松島町	
	絹本著色 仏涅槃図		1幅	松島町	
	絹本著色 仏涅槃図		1幅	原	
	絹本著色 観経曼荼羅図（正宗分）		1幅	原	
	紙本著色 鏡引図六曲屏風（内海元紀筆）		1隻	三島町1丁目	
	紙本著色 架鷹図六曲屏風（二代橋本長兵衛筆）		1双	三島町1丁目	
	紙本著色 桃園三傑図・山水図・（今村公龍筆）		各4面	三島町1丁目	
	紙本著色 架鷹図六曲屏風		1双	櫻曲	
	板絵著色 神功皇后三韓出征図絵馬（内海元孝筆）		1枚	山	
	紙本著色 楓下遊鯉図六曲屏風（内海吉堂筆）		1双	相生町	
	絹本著色 阿弥陀二十五菩薩来迎図（額装）		1枚	原	
	紙本著色 竹虎図様		4面	原	
	紙本淡彩 松鶴図様		4面	原	
	紙本墨画 山水図様		4面	原	
紙本著色 高山四皓図様	8面貼		原		
	付1面				
紙本著色 架鷹図六曲屏風（初代橋本長兵衛筆）	1隻		三島町1丁目		
紙本著色 不動明王図（一宮長常筆）	1幅		相生町		
紙本著色 花卉図様・曲水図様（内海元孝筆）	各5面		相生町		
紙本墨画 仙人図（初代橋本長兵衛筆）	6幅		相生町		
紙本墨画 枯木に鷹図（二代橋本長兵衛筆）	1幅		相生町		
紙本著色 一宮長常画像（勝山琢眼筆）	1幅		相生町		
絹本著色 観音・地藏像	1幅		原		
絹本墨画 十一面観音像	1幅		原		
紙本著色 架鷹図六曲屏風（初代橋本長兵衛筆）	1双		相生町		
建造物	天満神社本殿・石之間・拜殿		1棟	栄新町	
	杵見宝塔（石造）		1基	杵見	
	小刀根トンネル		1基	刀根	
	西福寺境内建物		5棟	原	
永賞寺九重塔（石造九重塔）	1基		栄新町		
書跡	紙本墨書 般若心経		1巻	三島町1丁目	
	紙本墨書 長歌（山田正秋書）		1幅	三島町1丁目	
	紙本墨書 大般若経第二百七十一（仁治二年五月廿二日 沙門良俊書写奥書）		1巻	相生町	
	紙本墨書 松尾芭蕉色ヶ浜遊記（神戸等執筆）	1幅	色浜		
典籍	敦賀志（石塚元著）	4冊	三島町1丁目		
	氣比宮社記（平松周家著）	9冊	相生町		
古文書	古文書（正安三年から慶長二年まで）	37通	手		
	刀根古文書（文明元年から寛永二十一年まで）	116通	江良		
	永建寺古文書（徳治三年から天文十年まで）	15通	松島町		
	善妙寺古文書（嘉慶二年から元禄四年まで）	29通	神楽町1丁目		
考古資料	敦賀馬借座役用記等諸記録	15冊	三島町1丁目		
	敦賀酒屋仲間文書（天和元年から明治十年まで）	85点	相生町		
	向出山古墳出土品	一括	三島町1丁目		
	深山寺経塚出土品	2点	三島町1丁目		
	金ヶ崎経塚出土品	3点	金ヶ崎町		

種別	区別	名称	員数	所在地	
有形文化財	歴史資料	紙本著色 氣比神宮古図	1幅	曙町	
		脇差（武田耕雲斎所用）	1口	松原町（相生町）	
		短刀（菊池千本槍・武田耕雲斎所用）	1口	松原町（相生町）	
		紙本著色 西福寺古図	1幅	原	
		竹杖（松尾芭蕉所用）	1本	本町2丁目	
		旧駒山藩領巨細書	5冊	三島町1丁目	
		紙本墨書 大日本史上表副本	1通	三島町1丁目	
		唐仁橋山車	1基	相生町	
		紙本墨書 門ヶ崎図（内海元孝筆）	1幅	三島町1丁目	
		紙本墨書 俳句・和歌帳紙（日能書）	1幅	三島町1丁目	
		紙本墨画 燕図画賛（鳥計富筆）	1幅	三島町1丁目	
		版画 紙漉図（内海元孝画）	1幅	三島町1丁目	
		大名等休泊札及び加賀藩宿陣札	12枚	三島町1丁目	
		板絵著色 大江山酒呑童子図絵馬（鳴海鶴陰筆）	1枚	三島町1丁目	
		紙本墨書 船中旋心得書	1巻	三島町1丁目	
		定広院墓地の石仏	33躯	正田	
		板絵著色 北前船図絵馬（文化元年紀）	1枚	三島町1丁目	
		紙本著色 敦賀町内図	1葉	三島町1丁目	
		紙本著色 敦賀泉管内町内図	17葉	三島町1丁目	
		敦賀西小学校沿革誌	44冊	結城町	
		紙本墨書 敦賀幸若屋敷図	1幅	三島2丁目	
		陣羽織及び筆扇（武田耕雲斎所用）	2点	松原町（相生町）	
		金ヶ辻山車	1基	相生町	
	紙本墨画 野菜園（一宮長常筆）	2枚	三島町1丁目		
	紙本著色 人物花鳥図画帳（橋本守忠筆）	1冊	三島町1丁目		
	紙本著色 武田耕雲斎画像（須木直正筆）	1幅	松原町（相生町）		
	御所辻山車	1基	元町（相生町）		
	版本 敦賀名勝詩（清化堂道碩著 元禄五年版）	1冊	相生町		
	絹本著色 敦賀津図（内海元紀筆）	1幅	相生町		
	民俗文化財	無形民俗文化財	松島さし踊り		松島町
			すてな踊り		敦賀市
			氣比神社の春祭り・秋祭り		刀根
			初午祭り		山
			駐蹕の碑		松原公園
			武田耕雲斎本陣跡		新保
			瓜生保戦死の地		櫻曲
			明治天皇御幸御小休所		櫻曲
			衣掛山1号墳		堂
			市野々柴田氏屋敷		市野々
		宮山古墳群		山泉	
		幸若遺跡庭園		三島町2丁目	
		常宮のオウム岩		常宮	
		門ヶ崎		白木	
史跡名勝		奥麻生・日吉神社のケヤキ		奥麻生	
		長者屋敷のスギ		奥麻生	
		鉢伏山のカツラ		阿曾	
		赤崎・八幡神社のカゴノキ		赤崎	
		金山彦神社のイチヨウ		金山	
		金山彦神社のハゼノキ		金山	
	関・八幡神社のツバキ（1群）		関		
	甘藷園のヤマモモ		市野々		
	永覚寺のイブキ		金ヶ崎町		
	小森神社のヤブニッケイ		大比田		
記念物	天然記念物	谷・八幡神社のスタジイ		谷	
		奥麻生・菅野氏のイチイ		奥麻生	
		氣比神社のツガ		刀根	
		久豆弥神社のスギ（2株）		杵見	
		曾々木・八幡神社のスギ（2株）		曾々木	
		市橋・日吉神社のスタジイ		市橋	
		大比田観音堂のタブノキ		大比田	
		小森神社のケヤキ		大比田	
		貴船神社のタブノキ		元比田	
		小河・寺谷氏のウラジロガシ		小河	
	西福寺のスタジイ（2株）		原		
	新善光寺のキャラボク		井川		
	曾々木・八幡神社のアカガシ		曾々木		
	氣比神宮のユーカリノキ		曙町		
	田結神社のスタジイ（2株）		田結		
	野坂・柴田氏庭園のヤマモモ		野坂		
	山・稲荷神社のウラジロガシ		山		
	甘藷園のクスノキ		市野々		
	杉著・山神社のトチノキ		杉著		
	筋生野・筋神社のカゴノキ		筋生野		
国立福井病院のユーカリノキ		桜ヶ丘			

・国登録文化財

種別	区別	名称	員数	所在地
登録有形文化財	建造物	旧紐育スタンダード石油会社倉庫 北棟	1棟	金ヶ崎町
		旧紐育スタンダード石油会社倉庫 南棟	1棟	金ヶ崎町
		旧紐育スタンダード石油会社倉庫		
		煉瓦塀	1基	金ヶ崎町
		旧敦賀倉庫株式会社新港第1号・第2号・第3号倉庫	1棟	蓬萊町
		旧北陸線櫻曲（かしまがり）トンネル		敦賀市櫻曲
		旧北陸線栗原（はばら）トンネル		敦賀市栗原～阿曾
		旧北陸線船ヶ谷（ふながや）トンネル		敦賀市阿曾
		旧北陸線曾路地谷（そろじだに）トンネル		敦賀市阿曾～杉津
		旧北陸線第一観音寺（だいいちかんのんじ）トンネル		敦賀市大比田～横浜

種別	区別	名称	員数	所在地
登録有形文化財	建造物	旧北陸線第二観音寺（だいいちかんのんじ）トンネル		敦賀市大比田
		旧北陸線曲谷（まがりだに）トンネル		敦賀市大比田
		旧北陸線芦谷（あしたに）トンネル		敦賀市元比田 ～大比田
		旧北陸線伊良谷（いらだに）トンネル		敦賀市元比田
		旧北陸線山中（やまなか）トンネル		敦賀市元比田 ～南越前町山中
		旧北陸線巖（わな）山谷（やまだに）暗渠		敦賀市横浜